

サマーワの笑顔のために
対話と共感を基調とする人道復興
支援

江端康行

在米国大使館二等書記官

見捨てられた町サマーワ

バグダードの南東約二八〇キロメートル、ユーフラテス川が東西を流れる人口三〇万人ほどの町サマーワ。巨大な水タンクと買い物客で賑わうスーク（市場）以外これと言つて目を引く建造物もなく、果てしなく続く土漠の中にぽつりと現れる無表情でざらついた町並み。市民のほとんどがシアア派のため、フセイン政権時代には意図的に見捨てられたのだろう。下水やゴミは悪臭を放ち、住民の多くが緑色に汚れたユーフラテス川の水に依存している。電気は一日三時間、病院や学校といった公共施

設は設備が乏しく廃墟のように朽ち果てていた。そのような中にあつて目を引くのは、道行く子どもたちが笑顔で手を振り、われわれに声援を送ってくれる姿だ。「ヤーバーニー（日本人）！」という声が防弾ガラスに跳ね返る。砂煙を上げる車の中でそんな光景を眺めながら、私は、「サマーワの笑顔」のためにわれわれは何ができるのか、と考えていた。

未知の領域

サマーワの外務省連絡事務所は陸上自衛隊宿営地の「出島」と呼ばれる一角にあり、一〇名の外務省員が五名ずつ一カ月ごとに交代する形で人道復興支援に当たっていた。私が初めてサマーワ入りしたのは、二〇〇四年五月。それから〇五年八月までの間、合計八回、約八カ月にわたり経済協力を担当し、給水、道路・橋梁、電力といったさまざまな政府開発援助（〇

DA）事業の実施に関わった。サマーワ人道復興支援は、そのすべてが未知の領域であり、困難と挑戦、試行錯誤の連続であった。

（1）過酷な自然環境

サマーワの自然環境はほぼ一年を通して過酷だ。夏の気温は五〇度以上、直射日光下では優に六〇度を超える一方、冬の気温は氷点下。特に夜はコンテナ（〇四年の



冬まではコンテナの中で寝泊りし

ていた）が底冷えして眠れず、朝はタンクの水が凍りついて顔も洗えない。季節の変わり目は砂嵐。一分足らずで髪もまつ毛も真っ白。あらゆる隙間から侵入する砂で部屋はザラザラ、パソコンが駄目になる。一方、雨季にはすさまじい豪雨が降り、市内の土漠はぐちゃぐちゃにぬかるみ、数カ月間は水が溜まったままだ。そして厄介な砂バエ。刺されるとかなり腫れて強烈なかゆみに襲われる。あれから一年以上も経つというのに刺された跡が今でもかゆいから大変だ。

（2）予断を許さない治安状況

サマーワの気候は次第に体の方が慣れてくるものだが、決して慣れてはいけないのが治安状況だ。宿営地外の活動では、重いヘルメットと防弾チョッキを着用し、陸上自衛隊と一緒に行動しない時は、屈強な警備要員に前後左右を囲まれる。場合によってはトイレにも行かせてもらえない。宿営地内は

陸自によって守られているものの、夜間には迫撃砲やロケット弾による攻撃の可能性がある。私も三回の迫撃砲と二回のロケット弾攻撃を経験した。迫撃砲着弾時の爆発音と衝撃、空気を切り裂くようなロケット弾の飛翔音は、われわれが置かれている状況を嫌でも教えてくれる。

(3) 陸上自衛隊との連携

このような状況下で外務省連絡事務所は、陸自業務支援隊と協力しながら復興支援事業を進めていった。両者の関係はよく「車の両輪」と形容されるが、私がサマーワに入った時はまさに「両輪」が全速力で稼働しようとしていた。外務省と陸自というまったく違う組織が各々の事業を連携して行なうのは初めての試みであり、ある多国籍軍関係者の言葉を借りれば「有り得ない」ことだそうだが、しばしば陸自の皆さんはわれわれのことを「戦友」と表現した。こ

の言葉はわれわれの関係を端的に物語っている。

(4) イラク人社会

イラク人社会は、政治、官僚、部族、宗教、それぞれのヒエラルキーが折り重なり、微妙なバランスで均衡している。バランスを崩せば対立が生まれかねないので神経を使う。誰の声を聞くべきか見極めることは非常に難しい。イラク人社会には、交渉相手を値踏みするようなどころや「一見さんお



断り」的な閉鎖性もあり、胸襟を開いて話ができるまでには時間もかかる。現場に足を運び、さまざまな声を聞き、いろいろなものを見て判断するしかない。イラク人は二、三時間も平気で喋り続けることもあるが、それも一つのプロセスだ。お陰で大勢の友人が出来たが、「たまには飲みにでも」と行かないのがイスラムの哀しさだ。

また、サマーワではマスメディアが発達していないが、情報の伝達は驚くほど速い。ニュースは瞬間に人伝で市内を駆け巡る。噂話は意外な影響力があり、注意が必要だ。

人道復興支援の現場

「サマーワを東京にしてほしい。」復興支援に携わる者が一度は聞き、耳を疑う言葉だ。今でこそ、「インシャーラー（神がお望みならば）」と笑って答えられるが、最初は面食らう。アラジンの魔法のランプ

でもあるまいしと思うのだが、元の住民はいたって真面目だ。そこで、われわれには何ができて何ができないのか、そして、復興の主役はわれわれではなく、あなた達である、という理念を説明し、理解してもらおうとところから仕事は始まる。

サマーワ市内では、毎週、給水、電力、道路、保健といった各分野について行政機関(局)、地方評議会、非政府組織(NGO)、多国籍軍等が一堂に会する定例会議が行なわれる。

この会議は、各地方の大まかなニーズを把握し、案件形成の第一歩となると同時に、実施後の案件の評価と改善方法を探る手掛りとなる。ただし、地方からの不満が噴出し、怒鳴り合いが一時も続くことがあり、忍耐力が必要だ。また、個別に行政機関、多国籍軍、国連開発計画(UNDP)及びNGOとの協議も行なった。個々のODA案件は行政機関(水

道局、電力局、道路局等」との話し合いを中心に形成されていくが、支援の全体像を把握する上で、他の支援団体との意見交換や調整は極めて重要である。特にUNDPやNGOの活動はODA案件を補完する上で重要な役割を果たした。

案件形成には数多くの協議を踏まえる必要があるが、支援の中心は現場である。決定するだけでは、地元民にとって意味はない。実際にその案件が実行され、機材や設備が当初の機能を果たすことが重要なのだ。このような特殊な環境での復興支援事業においては、可能な限り現場に通い、現地の人と会話し、案件の実施促進をきめ細かく行なうことが重要であると感じた。案件形成に際し各方面の意見を十分に聞いていても、しばしば地元住民とのトラブルが発生する。放っておけば住民間の対立に発展する恐れもあり、また、矛先がわれわれに向かいかねない。私は地元の評議会にお願いして関係

者を集めてもらい、とことん議論した。地元部族の人に恐ろしい形相で睨まれることもあったが、時間をかけて話し合い何度も足を運ぶうちに何とか最後は道が開けるものだ。復興のお手伝いをする側が支援を押し付けるべきではないし、地元住民間で調整できない、或いは納得しない案件を実施することは危険だ。事業が地元の共感を得るためには現場の地道な努力と対話によって培われる信頼関係が土台になればならない。それなりにリスクとコストを覚悟せねばならないが、成功する支援とはそういうものではないか、と私は思う。

サマーワの笑顔「キャプテン翼大作戦」

公共施設の修復など、多岐にわたる分野を手がけたが中でもムサンナー県にとり死活的に重要な給水事業には力を入れた。その中心



には県内四箇所に設置した浄水機により毎時合計二二〇トンもの水を浄水し、ムサンナー県全域に配備された給水タンクへ給水車を使って給水するという一大プロジェクトがあった。

この大事業の実施に際し、私は地元住民の共感を得られサマーワの子どもたちへの贈り物となるような、特別なことをしたいと思つた。そこで、目をつけたのが毎週ムサンナー県全域に水を配る給水

車であり、言わば「親善大使」として活用するということだ。その重責を担えるのは、イラクの子どもたちに大人気の「キャプテン・マージド」しかない。「キャプテン・マージド」とは、日本のサッカー漫画「キャプテン翼」のことである。「キャプテン・マージド」を巨大な給水車の側面に描き、ムサンナー県を駆け巡らせる。大好きなマージドが水を運んでくれたら、子どもたちは大喜びだろう。

この計画はすぐに実行された（詳細は外務省ホームページ参照）。

現在マージドこと「キャプテン翼」は毎日、サマーワ市内や砂漠の中を、貴重な水を元気に運び続けている。私も何度か子どもたちが一生懸命に翼君を追いかける姿を見かけた。どの笑顔も輝いていた。その姿にとっても勇気付けられ、日本人として誇らしく感じた。地方の評議会議員からは、「給水車が水曜日に来ることになっているが、子どもたちはマージドが来るのを

火曜日から待っているんだよ」と
教えられた。

対話と共感を基調とする支援

二〇〇六年七月、二年半に及んだサマーワでの人道復興支援活動は、一人の犠牲者もなく無事終了した。毎日が挑戦の連続であった。共通のゴールに向かい、立場を超えて協力が行なわれたことが良い結果をもたらした。また、決して安易な妥協をせず、回り道でも丁寧に地元の意見を聞き、主役はイラク人であるという理念の下、対話と共感を基調とする支援を誠実に実施してきたことがサマーワ市民の支持に繋がったのだろう。

日本では「日本の支援は感謝されていない」という報道を目にすることが多かったが、私が現地を感じてきたことは随分隔たりがある。さまざまな分野で実に多くの成果があったし、復興支援の現場では地元の人々から「シュコラ

ン(有り難う)」という感謝の思いをひしひしと感じていたからだ。

二〇〇五年八月、サマーワ最後の日、防弾ガラス越しにいつもどおり元気良く手を振る子ども達の姿を見つけた。その笑顔達を眺めながら、これまでにない充実感、安堵感、そして、多少の寂しさを感じつつ、サマーワの笑顔が消えないことを心から祈った。

